

ふるさと発見第5集

掛川市の埋蔵文化財



掛川市教育委員会

序にかえて

わがまち掛川市は豊かな自然と温暖な気候に恵まれ、縄文時代から祖先が生活してきており、数多くの遺跡や古墳が、古代、中世、近世と各時代に亘って埋蔵文化財として残されています。まことに郷土の歴史の深さを物語っているといえます。

今日、掛川市は「生涯学習都市」として新しいまちづくりを進めていますが、自然や環境との調和のとれた開発事業の促進は、市民生活の向上に欠くことのできないものであります。そして、開発事業の進展と共に、遺跡などの発掘調査も年を追って増加し、これにより原始時代からのようすを解明する貴重な資料が得られています。

これらの埋蔵文化財は、市民にとって、かけがえのない文化遺産であり宝であり、市民の暮らしをより豊かにし文化の香りに満ちた心のふるさとをつくるために、欠かすことのできないものであります。

このたび、「ふる里発見シリーズ」第5集として「掛川市の埋蔵文化財」を発刊するにあたり、埋蔵文化財を保護保全し、市民の共有財産として、後世に伝えていくことは私たちに課せられた大きな使命であると思えます。

この小冊子が、郷土の歴史を知り、豊かなふる里づくりの一助としてご活用いただければまことに幸いです。

昭和59年3月吉日

掛川市教育長 伊藤 昌 明

凡例・例言

1. 本書は、ふるさと再発見シリーズ第5集「掛川市の埋蔵文化財」として作成した。
2. 本書は、掛川市内に所在する遺跡について広く理解と関心を深めてもらうため、遺跡の概要や出土遺物の写真を主として編集した。
3. 本書は、各々の発掘に伴って発行された報告書にもとづき解説文とした。

※ 発掘写真、図解等の掲載にあたり、静岡大学、県教育委員会文化課、遠江考古学研究会など所蔵機関又は発掘調査にたずさわった関係者の方々のお世話になりました。

御協力頂きました関係各位に厚くお礼申し上げます。

目 次

発刊のことば	1
凡 例	2
掛川市の遺跡の概要	4
萩の段遺跡	6
中原遺跡	7
山下遺跡	9
大ヶ谷遺跡群	10
大六山遺跡	11
女高遺跡	12
梅橋北遺跡	13
高田金鈔原遺跡	14
行人塚古墳	16
金塚古墳	17
瓢塚古墳	20
大塚古墳	22
春林院古墳	24
天王山古墳群	27
宇洞ヶ谷横穴	29
別所横穴群	32
飛鳥横穴群	34
本村横穴群	36
岡津横穴群	37
殿谷城址	38
掛川市遺跡分布図	39
縄文時代～古墳時代の変遷	40～46
古墳時代出土遺物	46～49
古代史年表	50～51

表紙写真 (県指定) 宇洞ヶ谷横穴出土

変形四神四獣鏡

掛川市の遺跡の概要

古くから集落は、河川流域の肥沃な土地に発生し、生活が営まれてきました。

掛川市の遺跡分布においても、原野谷川・倉真川・逆川・垂木川などの河川の流域に各時代の遺跡がみられます。

中でも原野谷川流域の和田岡地域一帯は、原野谷川の豊かな水によって育まれた肥沃な土地で、緩やかな丘陵の台地には数多くの集落遺跡が興亡をくり返しました。またこの地域は、和田岡古墳群と称される古墳群が形成された地域としても広く知られています。

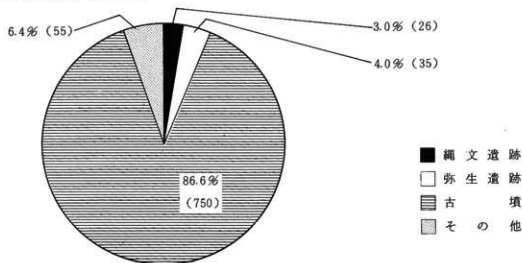
その遺跡の主なもの、中原遺跡、各和金鑄原、山下遺跡、行人塚(女高)遺跡、そして和田岡古墳群を構成する春林院、大塚、各和金塚、瓢塚(ひさごづか)、行人塚古墳などです。また、中世の山岳城館、殿谷城もこの河川の中流域に位置しています。

その他、垂木川右岸には別所横穴が、左岸には飛鳥横穴が、逆川流域には宇洞ヶ谷横穴、山麓横穴などがみられます。

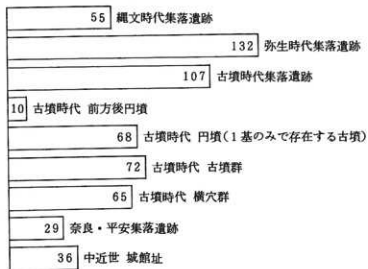
ここでは、掛川古代文化を築きあげてきた多くの遺跡の中から最も画期的と思われる遺跡をひろいあげて解説いたしました。

市内に分布する埋蔵文化財

埋蔵文化財 (866カ所)



市内に所在する遺跡数



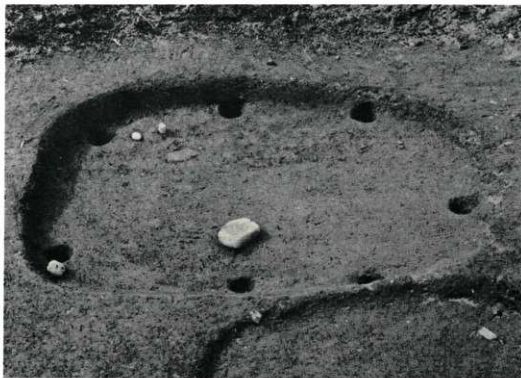
萩の段遺跡

所在地 掛川市原里字萩 1000 の 5

萩の段遺跡は、原野谷川を遡った原里地区の萩の段と呼ばれる台地のなかほどにあり、台地中央を南北に走る微隆起した稜線部ならびに台地周縁地域に分布し、茶畑の改植計画に伴い調査されました。

遺跡は、縄文時代及び弥生時代の竪穴式住居跡、小形竪穴状のもの、小形土壇状のもの屋外炉跡、隅円方形周溝墓などです。

遺物は、縄文式土器、弥生式土器、壺などで石器は少量でした。



竪穴式住居跡

調査により、柱穴のある竪穴住居が3軒、柱穴はないが屋根を葺いたとみられる竪穴が4軒、浅い小形竪穴状の遺構が8基、小形土壇状の遺構が9基、屋外炉跡1基が見いだされた。

な 中 原 遺 跡

所在地 掛川市高田字中原 1015～1018

中原遺跡は、原野谷川の浸食によって形成された河岸段丘上に立地する縄文時代中期（今から約5000年前）の遺跡です。

原野谷川の右岸には、上流域から中流域にかけて河岸段丘がよく発達しており、同時に縄文時代を中心として弥生時代、古墳時代の遺跡が数多く分布しています。

調査では、住居跡(当時の家の跡)1基と土坑(使用目的不明の穴)7基、そしてPit(小さな柱穴状の穴)が多数確認されました。

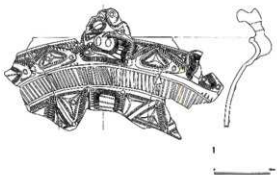
確認した住居跡は、遠江地方にあって縄文時代中期のものとしては数少ないものでした。家の平面的な大きさは4m30cm×4mで、丸い形をしています。屋根を支えた柱穴は4つで家の中心には石で囲った炉がありました。住居跡から出土した遺物(当時の人々が使用した物)は、土器の他石鏃(弓矢の先に付けた石器)、石錐(石で作られた錐)等がありました。

この他の土坑、Pitからも縄文時代中期に使用された土器片、石器が出土しています。

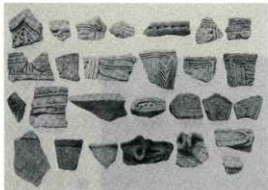


堅穴式住居跡

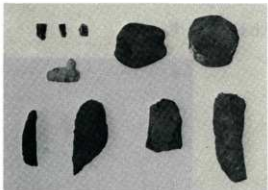
(中原遺跡)



深鉢土器



縄文中期(前半)の土器



石器

山 下 遺 跡

所在地 掛川市各和字山下

山下遺跡は、原野谷川右岸に形成された各和の河岸段丘上に所在する遺跡です。遺跡は今から約 2000 年前の弥生時代中期を中心とした墓跡で、付近には永源寺境内の古墳群、南に袋井市宇佐八幡古墳があります。

調査では弥生時代のお墓の一つの形態である方形周溝墓 7 基が確認されました。

方形周溝墓は、遺体を埋葬した穴（土坑）の周囲に溝をめぐらすお墓で、確認した方形周溝墓は一辺 3 m の小型のものから一辺 13 m を計る大型のものまでありました。

弥生時代中期のこの時期で方形周溝墓が群をなして確認された例は県内でもほとんどなく、稲作文化伝来を予想させる貴重な発見となりました。



方形周溝墓



広口長頸壺(上は出土状態)

おおがや 大ケ谷遺跡群

所在地 掛川市成滝字大ケ谷 748-15 外

掛川市立東中学校の北側一帯に広がる小丘陵にあった遺跡群で、宅地造成事業に伴ない、発掘調査しました。

発掘された遺構は、墓塚 10 ケ所、方形周溝墓 4 基、集石遺構 1 ケ所、円形周溝 1 基です。墓塚の形状はいずれも楕円形の小さな柱状の堀り込みでした。

出土した遺物は、弥生時代の土器のほか土師器及び須恵器の坏・小皿と常滑焼の破片、人骨、寛永通宝銭等がありました。

これらのことから、この遺跡は弥生時代中期（今から約 2000 年前）から中世前半（鎌倉期）および近世（江戸時代）にまでわたって使用された墓塚群であることが確認され、遺物の内容からこれらの墓塚群は庶民層の墓であったことがわかりました。



壺



台付甕

だい ろく ざん 大六山遺跡

所在地 掛川市満水字蛭田 275

大六山遺跡は弥生時代中期（今から約 1900 年程前）から古墳時代後期（今から約 1400 年程前）にかけて営まれた集落跡、墓跡です。

出土遺物は壺、甕などの土器片と石剣、石槍、鉄器片等でした。

その他この遺跡では、室町時代末から安土桃山時代前期に砦が築かれたことがわかりました。



大六山遺跡方形周溝墓

土塚（墓穴）のまわりに方形の溝をめぐるし、その中に遺骸を埋葬する葬法で、弥生時代中期頃より盛んにつくられました。

め 女 高 遺 跡

所在地 掛川市吉岡字女高 1188、1194～1196

女高遺跡は原野谷川が中流域に形成した河岸段丘上に占地する今から約1700年前の弥生時代末期から古墳時代初頭にかけて営まれた集落遺跡です。

遺跡の周辺には、和田岡古墳群で有名な瓢塚石墳、行人塚石墳があります。

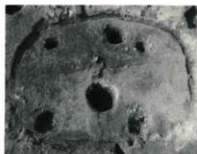
原野谷川が形成した河岸段丘は和田岡原において大きく二段に分かれており、上の段丘上には縄文時代の遺跡が、下の段丘上には弥生、古墳時代の遺跡が数多く存在しています。この下の段に営まれた弥生時代の遺跡の一つが女高遺跡です。

調査では、17基の住居跡、2基の掘立柱遺構、土坑13基、Pit状遺構多数が確認され、女高遺跡が規模の大きな集落（ムラ）であったことが想定されます。

掛川で稲作が開始したのは今からおよそ2000年前の頃であったと思われませんが、この女高遺跡の人々も付近の谷を使った稲作を行っていたことでしょう。人々が使った食器は、素焼の壺、甕、鉢、高坏（たかづゑ）（台の付いたお皿）等で主食として米、おかずに原野谷川から取れた魚、背後に控える畑地から得た雑穀類等を食事の主なものとして生活していたと思われま



女高遺跡全体



弥生時代住居跡

うめ ばし きた 梅橋北遺跡

所在地 掛川市徳泉字野添 81～84

梅橋北遺跡は、市内を流れる逆川と垂木川が合流する付近に広がりをもつ弥生時代後期（今から約 1700 年前）から中世時代（今から約 800 年前）にかけて営まれた複合の集落遺跡です。

調査では昔の垂木川の流路とそれに流れ込む溝、そして土坑（使用目的のわからない穴）が確認されました。確認した垂木川旧流路は、出土した土器から古墳時代以降のものであることがわかりました。川幅全体については不明ですが、流路幅が 3 m～5 m を計る大きさでした。溝は弥生時代後期のもつと平安時代後半から中世時代にかけて使われたもの 2 本を確認しています。



土器出土状態



溝状遺構

たか だ かな い ばら
高田金鑄原遺跡

所在地 掛川市高田字金鑄原

この遺跡は原野谷川右岸、各和原と呼ばれる河岸段丘上のなかほどに位置する今から約1700～2000年前の弥生時代中期から後期を中心とした集落遺跡です。茶樹の改植計画とあわせて、調査しました。

発掘された遺構は、住居と小屋に使ったとみられるもの合せておよそ30、人間を埋葬するために長方形あるいは楕円形の墓塚がおおよそ10か所、また、幅60cmほどの溝を直径13mほどの円形状につくり、その中心に長方形の埋葬塚がある円形周溝墓1基、溝状の遺構が6か所、小穴が多数ありました。

出土した遺物は土器と石器です。土器は壺や甕の破片が大部分で、器形がよくわかるのはごく少量です。石器は石斧、加工途中の原石などです。



住居跡



壺

和田岡古墳群



和田岡古墳群は、原野谷川右岸の洪積台地上に点在する「前方後円墳」を主とした古墳群です。

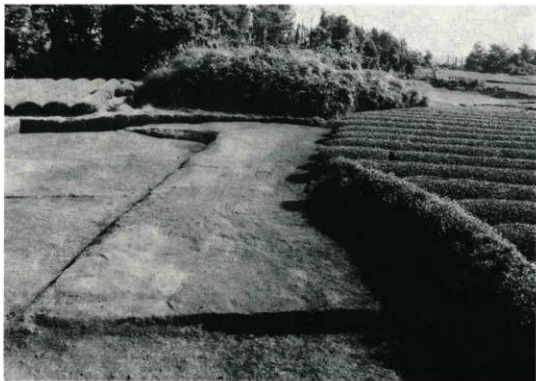
これらの中で金塚古墳（各和）・瓢塚古墳（吉岡）・大塚古墳（吉岡）の3基の前方後円墳がその中核をなしています。また、大塚古墳からさらに東には「円墳」として知られている春林院古墳があり、いずれも古墳時代中期前半（5世紀）頃に築造されたものと思われます。

ぎょう にん づか 行人塚古墳

所在地 掛川市吉岡字女高 1183

行人塚古墳は、原野谷川が形成した和田岡原台地上に占地する和田岡古墳群の一つです。

古墳の規模は全長約 42 m、後円部径約 24 m、前方部長約 18 m、西向き前方後円墳であり、周溝は前方部西側幅 2 m、北側最大幅が 7 m の規模をもち深さは確認面（耕作による削平面）から平均 20 cm を測り、くびれ部分において 30 cm を測るものです。



行人塚古墳

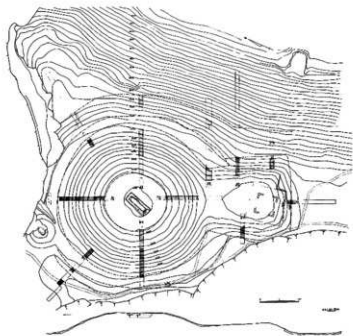
金塚古墳

所在地 掛川市各和金塚 1892

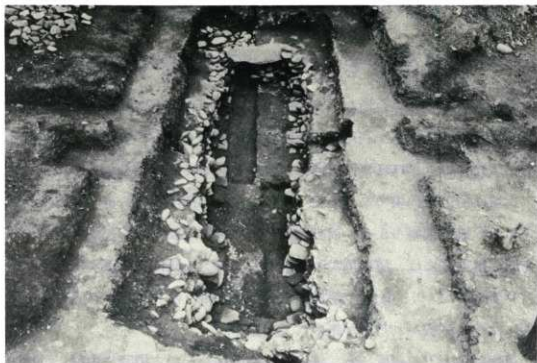
金塚古墳は各和原台地から東へ派生した細い丘陵上に築かれたものです。古墳は丘陵の高まりを利用し、周囲の地形を削り出し、さらに一部に盛土して墳丘を築き、ほぼ東南方向に前方部を向けて造られています。

古墳は前方後円墳であり全長 66.4 m、後円部径 51.2 m、後円部高さ 6.5 m、前方部幅 9.5 m、前方部高さ 4.0 m の規模をもち後円部および前方部の墳頂部には、埴輪列がめぐらされています。後円部墳頂には円礫の竪穴式石室があり、石室の規模は全長 4.75 m、幅 0.75 ~ 0.85 m で床面には小礫が敷かれ丹彩が施されています。

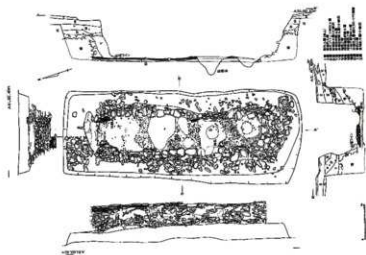
遺物は、大刀、短甲、剣、鉾、石製模造品などで古墳時代中期(5世紀)頃のものと思われます。



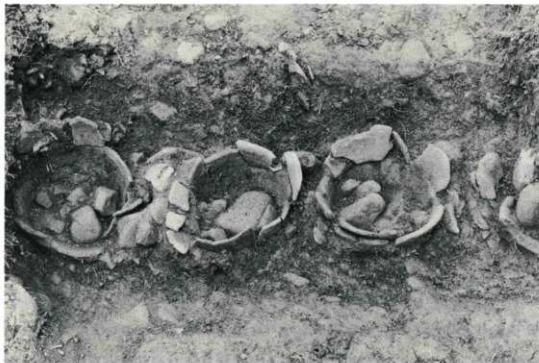
金塚古墳墳丘図



主体部(竖穴式石室)完掘状態



主体部実測図



埴輪出土状態



鉄製品出土状態

瓢塚古墳

所在地 掛川市吉岡字女高 1153

瓢塚古墳は、原野谷川が中流域右岸に形成した河岸段丘（和田岡原）の東縁辺部に築造された前方後円墳です。北の春林院古墳、吉岡の大塚古墳、南の各和金塚古墳とあわせて和田岡古墳群を構成しています。

古墳の規模は全長 63 m、後円部径 37.8 m、後円部の高さ 3.5 mを測る大きさでした。また古墳のまわりに巡る溝（周溝）の規模は推定で幅約 7 mです。

古墳の墳丘には全面に河原石が敷き詰められ（葺石^{ツギいし}）ており、墳丘面には円筒状の埴輪（円筒埴輪）がかなりの範囲に樹てられていたようです。

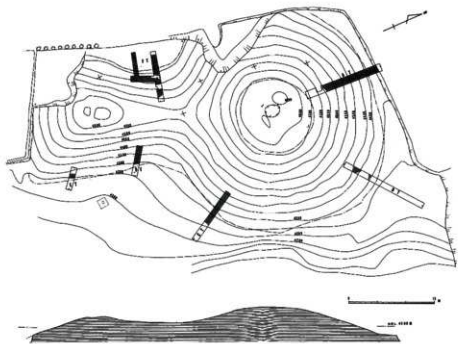
古墳の占有地形の様子を考えあわせ、瓢塚古墳の造営時期を求めると 5 世紀前半のものであることが想定できます。つまり瓢塚古墳は、5 世紀前半に原野谷川流域を支配した首長のお墓であったと思われます。



瓢塚古墳出土 壺形埴輪

壺形土器を儀器化したもので底部には、焼成前にあけられた円孔があり、朝顔形円筒埴輪の祖型として考えられています。

（静岡大学蔵）



瓢塚古墳墳丘図



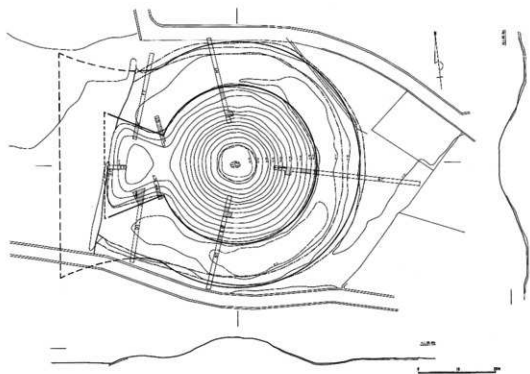
墳輸出土状態

おお つか 大 塚 古 墳

所在地 掛川市高田字大塚 1298~1

大塚古墳は、吉岡原台地のほぼなかほどに位置しています。吉岡原台地には、標高 60 m 内外の上位段丘と標高 52 m 内外の中位段丘がみられ本古墳の存するのは上位段丘の東寄りです。

規模は、墳丘全長 55 m、後円部径 41.3 m、前方部巾 27.5 m の前方後円墳で墳形は後円部に比して前方部がきわめて未発達で短く巾広くつくられた帆立貝型古墳です。年代は古墳時代中期（5 世紀）頃のものと思われます。



大塚古墳墳丘図



大塚古墳全景



墳輸出土状況



葺石部分

しゅん りん いん 春林院古墳

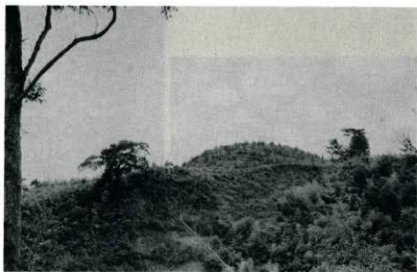
所在地 掛川市吉岡

春林院は、掛川市吉岡にある曹洞宗の古寺です。この寺は、和田岡台地が緩やかに広がる南東部の先端に位置し、その北側にはやはり広々とした茶畑が続いています。

古墳は台地の東端に位置しています。円墳で径 30 m、高さ 5 m、墳丘には二段に葺石がめぐらされています。墳頂には、埋葬施設としての粘土郭があり規模は全長 2.8 m、幅 1.25 m、深さ 0.95 m です。内部の床面は砂礫を含んだ黄色粘土で固められています。

出土遺物は、剣・鉞（ヤリガンナ）・針などの鉄製品、壺形土器、壺形埴輪などがあります。

この円墳は5世紀の前半、原野谷川流域に村落を形成していた人々の指導者のお墓ではないかと思われます。



春林院古墳遠景



春林院古墳の全景



葺石の調査

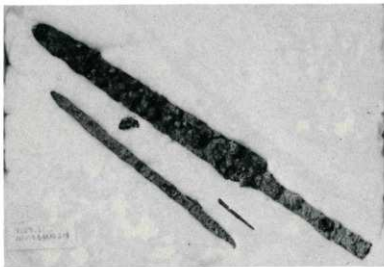


壺形土器(土師器)

墳頂部の西南隅から発見されたもので、人為的に掘られた穴の中に完全な形のまま埋められていました。

おそらく埋葬の時に供物を入れて奉獻し死者の霊をまつたと思われます。

(「春林院古墳報告書」より抜粋)



鉄製の剣と鏃(やりかんな)

天王山古墳群

所在地 掛川市下西郷 85

調査では昭和 42 年下西郷の県営住宅団地造成土取り用地として龍尾神社がある天王山の一部がその対象となりました。

遺跡の規模は一号墳で直径 10.5 m、高さ 1 m の円墳です。2号墳は東西径 10.5 m、南北径 11.5 m、高さ 1 m の楕円形の円墳です。

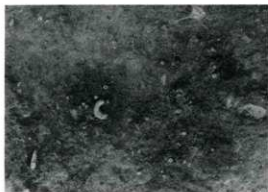
遺物は管玉(くだたま)、丸玉などの装身具のほか、鉄製品などで古墳時代後期(6世紀頃)つくられたものです。



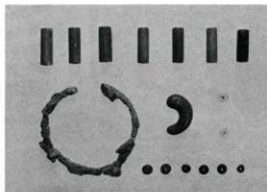
天王山古墳群跡
(現、下西郷促進住宅)



竪穴式住居跡



勾玉とガラス玉出土状態



玉類及鉄輪

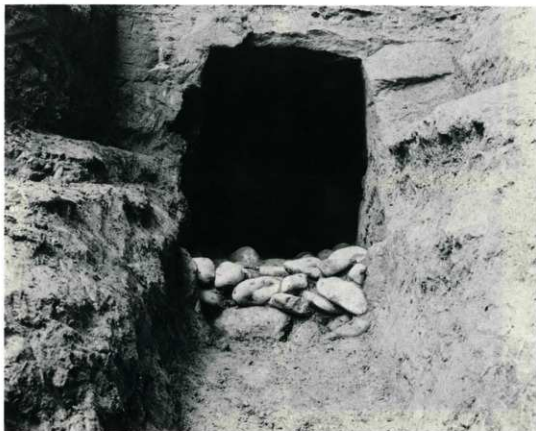
宇洞ヶ谷横穴

所在地 掛川市下俣字宇洞ヶ谷 921

宇洞ヶ谷横穴は、昭和 39 年し尿処理場建設工事中に発見されたもので古墳時代後期（6 世紀）の人間を埋葬した横穴です。

横穴墳の全長は、約 8.6 m で玄室・羨道・墓道の三部よりなり、玄室には長さ 4.5 m、中央部の巾 3 m、高さ 0.9 m の棺が造りつけにされています。

出土遺物は、鏡、装身具類、馬具類、土器類、武器類など多くその史料学的、工芸的価値が認められて昭和 43 年 3 月 19 日付で静岡県指定文化財となっています。



宇洞ヶ谷横穴入口部



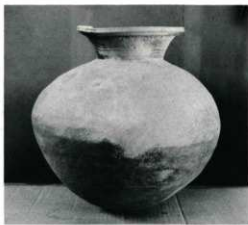
台付埴



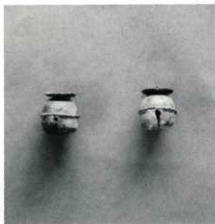
高坏



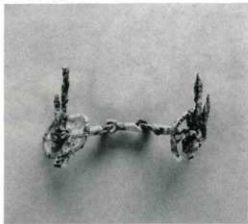
变形四神四獣鏡



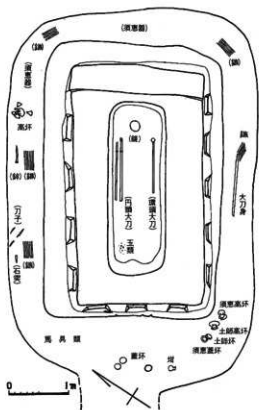
大壺



馬具(鈴)



馬具(鈴)



横穴墳副装品配列復原図 宇洞ヶ谷横穴墳発掘調査報告書より
(静岡県教育委員会)



宇洞ヶ谷横穴 単龍式 環頭大刀柄頭

別所横穴群

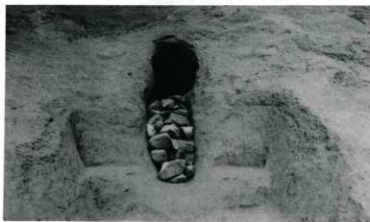
所在地 掛川市家代別所 556～13

この横穴群は、昭和 57 年 9 月の台風 18 号によって発見された横穴群で遺跡の少ない家代地区において大きな発見となりました。

横穴の玄室の規模は、全長 2.95 m、最大幅 1.66 m、高さ 1.41 m で平面プランは長方形を呈す妻入り形態です。玄室の入口部(玄門部)には、多数の河原石が積みあげられており、こうすることによって死の世界と生の世界とを区別していました。この玄室封鎖施設の規模は、全長 1.26 m、最大幅 1.05 m、高さ 1.05 m という範囲に河原石を積みあげるものです。玄門に通じる通路(羨道部)は、全長 1.61 m、最大幅 0.6 m、高さ 1.2 m 程の規模で、玄門部から約 3 度の傾斜をもって墓前域に通じていました。

出土した遺物は、人骨が 3 遺体分、装身具、副装品としての土器、鉄製品です。装身具は、勾玉・金環などで、土器は、坏身・坏蓋・広口埴などです。

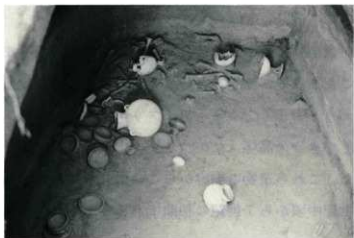
これらの出土品から、この横穴は今から 1500 年程前の古墳時代後期(6 世紀末葉から 7 世紀前葉)に構築されたものと思われます。



別所横穴入口部



別所横穴出土須恵器



別所横穴遺物出土状態



あす か 飛鳥横穴群

所在地 掛川市下垂木字上3526-3

この横穴群は、古くから県内外に広く知れわたった横穴群です。

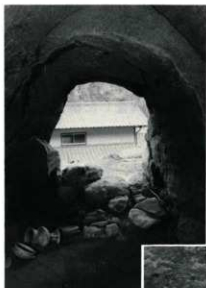
昭和58年3月に調査し横穴群の周辺には数多くの横穴があり、金谷池周辺、岩谷に分布しています。

調査では、5基の横穴が調査の対象となりました。5基のうち3基は天井部が大きく崩壊しており全貌を知ることができませんでしたが、残り2基については比較的保存状態が良く横穴の規模等を確認することができました。

出土した遺物は、人骨が数個体確認され、装身具として金環・勾玉(まがたま)・切子玉(きりこだま)等が出土しています。鉄製品では、大刀(たち)・鉄鏃(てつぞく)・刀子(とうす=ナイフ)が出土しており、土器では須恵器の壺・坏(つき)・高坏(たかつき)、少数ですが土師器の坏・高坏が出土しました。これら遺物の内容からこの横穴群が造営された時代が古墳時代後期6世紀中頃から7世紀の初頭であることがわかりました。



飛鳥横穴群全体



飛鳥横穴内部

飛鳥横穴入口部



出土土器類(須恵器)

本^{ほん}村^{むら}横穴群

所在地 掛川市領家字屋敷腰 805-2-1
805-2-2

本村横穴群は、昭和 41 年東名高速道路建設に伴い調査した横穴で、高御所から領家にかけてつくられた 11 基の横穴です。

出土遺物は、鉄製品の大刀、鉄鎌、勾玉などの装身具、蓋坏などの須恵器で古墳時代後期（6 世紀後半～7 世紀前半）頃のものと思われます。



本村横穴群全景

おか つ 岡 津 横 穴 群

所在地 掛川市岡津字大治ヶ井戸 433
" " 字東谷田 429. 430

岡津横穴墳群は、昭和 42 年東名高速道路建設に伴う採土工事中に発見され調査したもので、岡津原丘陵の東南端部に形成された、小規模な開折谷が東西に分岐し中央に半島状の小丘陵が形成され、この西斜面につくられた 8 基の横穴群と、南端部から東斜面にかけてつくられた 16 基の横穴あわせて 24 基の横穴です。

出土した遺物は、少量の須恵器と人骨片で古墳時代後期（6 世紀後半～7 世紀前半）のものと思われます。



岡津横穴群全景

とんの 殿 谷 城 址

所在地 掛川市本郷字殿谷

殿谷城は正式には高藤城と呼ばれる中世の城址で、「掛川誌稿」によると「殿谷故城殿谷という云所の山に城の段と呼ぶ所あり、昔、原氏の子城と云えり」とあり、城址碑にも「元徳三年（1331）八代益忠築城」とあることから原氏一族の城郭であったことがわかります。

この城は、原野谷川中流域左岸の本郷、細谷そして遊家、家代の四地区にまたがる標高 117 m の山頂に築かれた山城です。城址の主郭（一の曲輪）に立つと、東方に粟ヶ岳、北方に原氏の本処本郷館や幡鎌氏の館を望み、西方には吉岡城や各和城を一望できます。こうした条件は山城として格好なことであり、原野谷川流域を支配した原氏にとって中心的城郭となりえるものとして理想的な地勢であったといえます。一の曲輪、東の曲輪において数多くの陶器破片が検出され、両曲輪が城の主郭であったことが想定されました。三の曲輪では、一の曲輪に通じる古道が検出されました。中位段には、小礫の配石と径 30 cm 程の河原石を敷き並べた石列が確認されました。下位段では建物の柱穴が 17 確認されており、この下位段上に城の主な建物が建っていたことがわかり、この殿谷城が単に戦闘用詰城として使われたのではなく、一時的に居城としても使われていたことが想定されました。



殿谷城址一の曲輪全体



殿谷城址一の曲輪建物跡

掛川市遺跡分布図



- | | |
|----------|------------|
| 1. 女高遺跡 | 8. 金鑄原遺跡 |
| 2. 殿谷城址 | 9. 山下遺跡 |
| 3. 別所横穴 | 10. 梅橋北遺跡 |
| 4. 飛鳥横穴群 | 11. 岡津横穴 |
| 5. 大六山遺跡 | 12. 宇洞ヶ谷横穴 |
| 6. 大六山遺跡 | 13. 天王山古墳群 |
| 7. 中原遺跡 | 14. 本村横穴群 |

縄文時代～古墳時代の変遷

縄 文 時 代

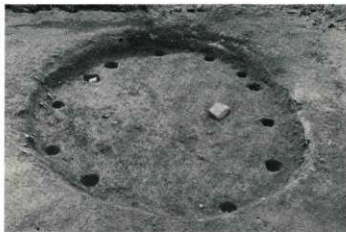
縄文時代の始まりと生活環境

日本列島が大陸から切り離された今から約1万年程前、地質学上沖積世と呼ばれる時代になると気候も温暖になり自然の景観も変化して地上は動植物の生棲に非常に恵まれた環境となりました。

このような自然環境の変化の中で、人類の生活は新しい発展を遂げていくことになります。

例えば狩猟用の道具として新しく弓矢が発明されたり、調理・貯蔵用具として土器が作られたりしました。また人々の住む住居も、前時代のような自然の洞窟を使用することから自らの手で住居を作る段階へと進歩しました。（地面を円形に掘って柱を立て、屋根を葺いて作ったもので、竪穴式住居と呼ばれています。）

市内においても、原里にある萩の段遺跡から住居跡が発見されました。



萩の段遺跡住居跡

縄文時代早期をすぎ、前期から中期へ入ると道具類の製作技術は進歩し、種々の道具が作りだされました。狩猟・漁撈用具では、弓矢をはじめ動物の骨を鋭く研いで作った（骨角器）釣針や鈎などが獲物の捕獲に役立ち、また調理用器具として土器類の他、石皿や石臼、その他石斧や石槍、石鏃等が出現しました。これらの石器は、石材をうちかち、うち整えてつくった研磨製石器で、新石器文化の基本的特徴を呈するものです。

こうして人々の生活は除々に発展の兆しをみせ、生活水準の向上は、人口増加と集落の拡大化をもたらし、土偶・土面・技術等で象徴される宗教的精神文化をも発展させました。しかし貧富の差はまだなく、採集した食物を公平に分配しあって集落単位の自給自足生活を営んでいたようです。

縄文後期は中期に引き続いて、集落の規模が大きくなり、縄文時代の代表的な遺物である貝塚を形成する集落が出現しました。

中期から晩期にかけての集落の拡大や人口増加、又食料獲得方法の進歩は、やがて人々の生活に深刻な問題をひき起こす要因となります。なぜなら長年間の自然界における動植物の乱獲により、晩期には食料資源の不足をもたらしたからです。狩猟採集の営みの上に成り立っていた人々の生活のバランスは揺ぎはじめ、集落内の規制や呪術によって何とかこの危機を乗り越えようと試みますが、実際問題として採集経済に換わる新たな食料獲得の方法を見出す必要にせまられることになりました。

弥 生 時 代

数千年もの長い間存続した狩猟・採集の時代も、紀元前3世紀から2世紀頃になると中国大陸から伝播した種々の新技術（水田耕作、金属器等）により過渡期を迎え、人々の暮らしはしだいに農耕生活＝弥生時代へと移り変わっていきます。このことはまた、停滞期の自然経済の段階を乗り越え、新しい生産経済にとって換わる大きな飛躍となりました。

農耕が生産の基盤的中心になると社会の様子が変わりはじめます。弥生時代の中期頃には東日本の各地域にも弥生文化が伝播し、紀元前後にはほぼ全国的な広がりをみました。その特色は県内でも登呂遺跡に顕著にみられ、鉄器や青銅器の使用、木製農耕具の開発、土器の多様化、水田をもつ大規模な集落など農耕文化の様相をみることができます。こうして農耕が生産の中心になると社会の様子が少しずつ変わりはじめます。大規模な水田工事、計画的な種まき・収穫が必要となりムラは指導者を中心に一集団としてのまとまりを強めてゆきます。そしてはじめは自然発生的であったムラのまとめ役である指導者は、農耕の本格化とともにしだいに固定化された存在となり、やがてムラの支配者としての地位を確立し、したがって階層の分化が生じてきます。こうした社会の変化は墓制の変化にも反映していると考えられます。弥生時代中期頃になると方形周溝墓とよばれる溝で囲んだ中に遺骸を埋葬する葬法が使用され始めます。これらは集落に近接した場所に墓域として設けられ、いくつかまとまって検出されたことから集団の墓地であったことがわかります。こうした現象は各河川の流域に中心的なムラが形成され始めた頃と思われます。

また後期の終り頃になると、墓地は集落から離れ、平野を見下す丘陵地に造られ小規模ながら墳丘の形を呈したものも出現しました。これは集団

墓地から個人の墓への変化を示し、ムラの指導者が自らの権威を強化し、しだいに支配者としての立場を固めていく過程を示す一つの姿であると考えられます。

大六山遺跡方形周溝墓



古墳時代

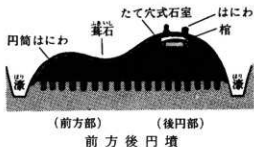
3世紀末頃から4世紀初頭にかけて、瀬戸内海沿岸から近畿にわたる地域に「古墳」が築造されはじめます。古墳は地面の傾斜をかなり利用して築造され、主として集落や水田など平野部が見わたせる丘陵上に造られ、その多くは「前方後円墳」と呼ばれる型をしていました。

古墳の表面には石がふかれ（葺石）周濠を設け、少し時代が進むと墓域との区画のための埴輪もめぐらされ、内部には長大な棺が安置されその周囲には中国産の銅鏡や鉄製の武器、農耕具、装身具類などが副葬されました。

4世紀後半から5世紀になると、前方後円墳の築造範囲は東は宮城県から西は鹿児島県まで、ほぼ全国的に広がっていきます。特に古墳時代の最盛期といわれる5世紀には、近畿地方に「仁徳陵」にみられるような巨大

な古墳が出現します。平野部をひかえた低い台地に巨大な盛土による墳丘を築き、水をたたえた堀をめぐるなど土木技術の面でも非常な進歩がみられます。これらの現象は大和朝廷の政治的影響力の反映であり、国家統治の成果であったと思われます。古墳には多量の鉄製武具や農耕具、さらに馬具類も副葬されており、このことは当時の大王や各地の首長たちが武器や生産用具の製造と流通を独占し軍事や開発の主導権をにぎっていたことを示しています。この背景には先進国中国や朝鮮との接触をぬきにしては考えられません。

この時期の様式をもつ市内の古墳としては、金塚古墳（各和）・瓢塚古墳（吉岡）・大塚古墳（吉岡）などがあげられます。



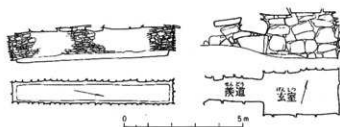
5世紀代における積極的対外交流により朝鮮半島からの渡来人によってすぐれた生産技術（農業・工業・窯業）や軍事的技術が導入されました。

また墓制においても、古墳時代前期に多くみられた「竪穴式石室」（墳丘の頂上に竪穴を掘り、木棺を粘土床にのせ石室でおおう方法）から新しく「横穴式石室」〔巨石をならべた長方形の室で奥に玄室（遺体安置の場所）があり、その前方には石をならべて天井とし、羨道（通路）を設けています。棺は箱形石棺や家形石棺などが納められています。〕を用いる方法に変化していきました。

こうして生産技術の発達には玉類、金・銀・ガラス製品などの装身具類やぜいたく品、武具・馬具の他鉄製農耕具、土器類の実用品にいたるまで支

配階級はもとより一般の人々の生活の中にも波及し、新しい農具での田畑の開墾も進むなど人々の生活向上に大きな役割を果たしました。

しかしこうした生産技術の進展の一方では、階層の分化をより進めることになりました。

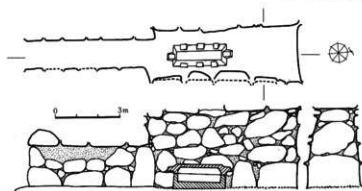


整穴式石室と横穴式石室模式図



石 棺

(歴史散歩事典より)



賤機山古墳(静岡市)の横穴式石室図

6世紀になると肥沃な平野の周辺だけでなく、山間部や内海の小島に至る各地に古墳が築造されはじめました。その多くは直径十数メートル前後

の小円墳や丘陵斜面に穴をあけた横穴であったりしましたが、それらは群集して存在し、ある地域では数百基の群集墳を構成しているものも出現しました。

古墳内部は横穴式石室や横穴からなり、武具や装身具のほか供物を入れた土器（須恵器・土師器）が多くなりました。

この頃の市内の古墳として、宇洞ヶ谷横穴、山麓横穴群などがあげられます。

こうした群集墳の成立は、今まで支配下にあった人々が新しい農耕具や技術に支えられて家族的規模の単位で生活を向上させていったことを示しています。

この傾向は支配者からみると従来の大王一地域集団の首長一地域の人々といった支配体制から地域の人々を直接大王の支配下に組織する必要がありました。この体制の整備が従来統治体制である氏族社会からいわゆる大化改新を原点とする律令国家体制への移行なのです。

一方古墳の築造も新体制による中央集権化や仏教の伝来、火葬の風習など大陸文化の影響が色濃くなるにつれ、7世紀～8世紀初頭を境としては全国的に築造されなくなります。

市内の横穴で6世紀後半から7世紀前半の横穴には、岡津横穴群、本村横穴群、飛鳥横穴群、別所横穴群などがあげられます。

〈古墳の出土品〉

古墳に副葬された貴重な品々は、前期には、鏡・玉など司祭者的性格を、中期以降は被葬者の軍事的指導者としての権力の象徴を示す武具・馬具類が増加してきます。

また、これによって当時の豪族の生活文化、造形美術の発達、大陸文化との交渉などを知る貴重な考古資料となっています。

(玉類)

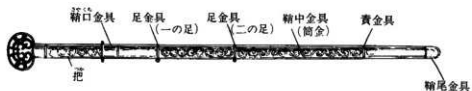
勾玉(まがたま)・管玉(くだたま)・切子玉(きりこだま)など装身具として使用されました。

(鏡)

大陸文化の摂取を示す貴重な資料です。

(武具)

古墳時代は特に鉄製武具の発達が著しく、長大な直刀なぐさがあらわれ、意匠をこらした柄頭(つかがしら)のある刀がつくられ、古墳に副葬されました。



環頭大刀図

(歴史散歩事典山川出版社より)



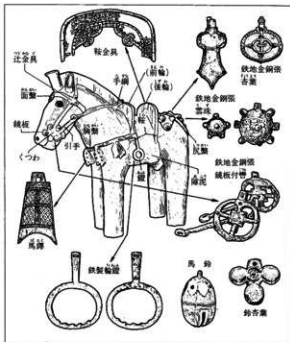
環頭大刀

(宇洞ヶ谷横穴出土)

(馬具)

馬具もまた、中期以降の古墳から発見される特色ある遺物です。朝鮮との政治的外交関係が深まるにつれ、国内にはなかった乗馬の風習がもたらされたことは、大和朝廷の国家統一に大きな役割を果たしました。

掛川市においても、このような武具、馬具は宇洞ヶ谷横穴の出土品の中にもみられ、機能的、装飾性に工夫をこらしたすぐれた技術の背景に、朝鮮半島との文化交流の様子がうかがえます。



古墳出土の馬具 (歴史散歩事典山川出版社より)

(埴輪)

古墳時代の象徴ともいえるべき出土遺物のなかに埴輪があげられます。埴輪は、いろいろな形をした素焼の土器で、古墳の墳丘にならべるために使用されたものです。発生事情については、古墳の装飾化とか聖域区別な

どが一般的見解で、あと殉死代用などもあげられますが、いずれも決定的なものではありません。

また埴輪は、円筒埴輪と形象埴輪（人物・動物・家屋・器具他各種の形があります。）とに分けられ、円筒埴輪は文字どおり円い筒で墳丘の周囲におかれました。掛川市吉岡の瓢塚古墳から出土した壺形埴輪は、壺形土器を儀器化したもので、壺口がラッパ状にひらき（朝顔型円筒埴輪）朝顔型円筒埴輪の祖型として注目されるものです。この埴輪列は、聖域との区画をする役割がうかがえますが、4世紀以降みられる形象埴輪は、人物、鳥獣、家屋、倉庫、調度品、武具、舟にいたるまで各種あり、葬列の状を形式化しています。これによって、古墳時代に生活していた人々の風俗習慣を知ることができます。

（土師器と須恵器）

古墳時代には系統の異なった2種類の土器がつくられました。

土師器は、弥生式土器とあまり大差はなく、低い温度で焼かれ吸水性がある赤色の素焼です。文様はなく、その多くは甕・甑・坏・鉢などの台所用具、容器で民間で使用されました。

須恵器は、1000度以上の高熱で焼かれ吸水性はなく、単色か灰褐色をしており非常にかたいのが特徴です。埴化工人の手によって5世紀ごろからつくられ、壺・甕・蓋・坏・高坏・器台などの種類があり、上流社会に普及しました。

古 代 史 年 表

年代	時代	全国のできごと	掛川市内のできごと	生活の様子			
今から 約12000年前	旧石器	岩宿遺跡(群馬県)・ 休場遺跡(沼津市) 寺谷、広野(磐田市) で生活の跡見つかる。		<ul style="list-style-type: none"> ・打製石器の使用 ・縄文土器、弓矢が つくられる ・貝塚がつくられる ・竪穴式住居 ・集落の形成 ・土器の用途分化 ・狩猟、漁撈、採集 ・稲作の伝播 ・鉄器、青銅器の伝 来 ・弥生土器 (銅鐸、銅剣、銅鉾 製造) 			
					草創期	加曾利(千葉県)で貝 塚形成	萩の段遺跡(寺島)で押型 文土器見つかる
					早期		
					前期		中原遺跡で集落形成される
					中期		萩の段遺跡で集落形成
					後期		
					晩期	観塚(浜松市)で貝塚 形成	
					弥生 前期		上の段遺跡 萩の段遺跡
					BC		
					300 (1,700年前)	AD	
中期	卑弥呼女王となる						
後期	登呂遺跡出現 邪馬台国女王卑弥呼 魏に遣使	行人塚、女高、梅橋北遺 跡で集落	鉄製農具、土師器 の使用				
	古墳 前期	大和朝廷の統一始まる		大陸から諸技術の伝来			

年代	時代		全国のできごと	掛川市内のできごと	生活の様子
400	古墳	前期	古墳の築造 (前方後円墳の出現) 松林山(磐田市)古墳	和田岡古墳群の形成 (春林院・金塚・瓢塚・大塚等)	須恵器の使用
		中期	三池平(清水市)古墳 帰化人盛んに渡来する 仏教の伝来		鏡・玉剣への信仰 須恵器の使用
500	古墳	後期	聖徳太子、憲法17条をつくる 645 大化の改新	宇洞ヶ谷横穴群の築造 別所横穴・飛鳥横穴群の築造・本村・岡津横穴群の築造 岡津横穴群の築造	寺院がさかんにつくられる
600					
700	奈良		710 奈良に都がつくられる(平城京) 板灰遺跡(袋井市)で官衛できる		火葬墓の出現
800	平安		794 京都に都がつくられる(平安京)		



銘文

この掛川の地は

太古より人が住みつき 栄え

多くの埋蔵文化財を残した

近代文明は

これらの一部を無造作に破損し

或いは変形した

ここに

先人の靈魂を鎮めるとともに

その加護により

新しい定住の地

掛川づくりの曙となることを

祈念して この碑を建つ

昭和五十四年三月

発行日	昭和59年3月31日
編集	掛川市教育委員会
発行	掛川市教育委員会
印刷	働幸栄印刷



文化財愛護シンボルマーク